

Title	コペルニク(詩)
Author(s)	ノイエス, アルフレド
Citation	天界 = The heavens (1930), 11(117): 107-112
Issue Date	1930-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161607
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

コペルニク (詩)

アルフレド・ノイエス

(L星⁷第5號よりの續き)

一生涯、かくれたる學者としてポーランドの田舎に宇宙研究に耽つた此の地動說首唱者は、著はした一書 De Revolutionibus が、辛うじて臨終の床を飾つたといひ傳へられる奇しき運命の持ち主である。此の詩は現代の詩人ノイエスがコペルニクの人と學とをうたつたもので、よく理學者の心境を書き、世と時代とを教へてゐる詩である。取材と構想と共に珍らしい劇詩であるとも見られる。なやみと戦ひの學究生活に精進したコペルニク、宇宙の眞理と世の權威と、友の情誼との間に一生涯を捧げたコペルニクを巧みに書いてゐる。

けれど吾は之に挫けなかつた、吾は
渾沌中にも光りを見、數多き亂夢の中にも
今や輝やかしき樂の音の動くを知る。
實に、かの絶大な天が地球をめぐるといふ
此れほど馬鹿けた考へが有るものか!!
天が日毎に一巡するものならば、其の速さは、
電光さへも、夜の壁を匍ふ^Lなめくち⁷の如くに見えやう。
若し、地球が軸のまはりを巡るとすれば、
それは、ごく緩やかな靜かな回轉で好いわけなのだ。
空が動くと見えるのは、それは吾々自身が
動いてゐるからだ。それに、昔から幾代もの間、
人々の大多數は、生活も、思想も、藝術も、皆迷はされて、
自分の魂が一轉する毎に、
天が巡ると思つたのだつた。

渾沌の上に光り、光り、尙も光あれ！

吾れ遊星を見守るに——

金星や火星も、月々に盈虚の相あるは、

其れ等が、地球から或は近く、或は遠く、動くためか、

地球は星々の中心では有り得ない。然らば

ピタゴラスの考への如く、

太陽こそ星々の王か？

かく完成し安定した地球も、

やはり一遊星か？ 其れも太陽のまほりを

巡るのか？ 若し其れが眞實なら、友よ、

此の世の亂れ狂ひも、

かのローマ法王國を暗黒に導びいた暗愚世界も、

吾々の思想を囚へて了うことはない。

吾れは吾れ自らの優秀を信じ、

この誇らしき宇宙の中央世界に、

神々の子として勇ましく歩み、

天空の光りは皆この吾人の榮譽のために

巡り廻ると信じてゐた吾れ等が、

今、廣大無邊の世界に途を迷ふ埃の小球上の

蟻の如く、むしろ、匍ひまはらねばならぬのか？

吾は此の無知暗黒を軽く取り去り得ず、

幾年も、書物の發表を見合はせてゐたが、遂に

吾れ明らかに見、ローマ法王も推薦した——ア、

未だ持つて來ないのか？——

かの壯大な音楽も、
更に高尚な魂の音楽を亡ほし得ず、
又は、救主聖誕の時に輝やいた光を消すことも出来ない。
若し一つの星が王たちを神の獨り子へ導くならば、
誰が彼等に從つて神の永世へ行くことを躊躇するや？
吾等は知る。人の魂は高く天を飛び得る。
吾が翼の力により、世界をさへ脚下に
いと小さく見る。されば、魂に勇氣あれ！
若し自らの思想だに眞ならば、
矮少なる心が幾程集り來ても
此の聖火を消し得ない。

否々、我が魂が其の王國を征服して
延び延びと、カーバイ延び上る此の新しい夜が
永く待たれた。故に、今や死の面前にて
吾は眞理と知ることを語らねばならない。

未だ持つて來ないか？ 書物は何故遅れるのか？
心配だ。友よ、眞實を話してくれ。
今の此の最後の時にも、教會は許可を差し控へるのか。
教會ではなくて、何か後ろめたき者が之れを妨げるのか？
若し果して然らば、彼等の意に委せよ。若し吾が得し微光が
吾等を迷はし、光りの主に盲目ならしめるならば、
吾等の總ての知識を滅ほせよ。吾れ保證せん。
眞の教會は、來るべき敗北のあらゆる悶えと、

多くの懐疑時代の後に、大なる暗黒が迫り来て、
驚異の大衆群は、祭壇をめぐる燭台の如く焼かれん。
故に、吾は、自己のためと言はず、むしろ未來の世のために語る。
吾は吾れに先行する者即ち
其の自己の行方も知らず炬火を持つ者の火を獲た。
彼等の火を持ちて、吾は只少しく先きへ運んだのみ。
しかし、吾は知る、世には此の火を待ちつゝ。
其を更に進めて、勝利にまで至らん者があらう。
此等の者を失敗させてはならぬ。又、吾れ來し方を見るに、
腕を高く舉げ、未來を指さしつゝ、其のまゝ倒れ
且つ死にし者多し。もつと、もつと昔しに、
エジプト人がかのピラミドを建て、
北へ向いた暗い穴の墓場から
バロ王たちが、終夜、北極星を眺めた——其の以前に、
さまよひの或るアラビヤ人が、かの聖い寶石に飾られた
北斗に導かれて。死から生へ甦つた……………
ズツと以前——未だ彼等は持つて來ないのか？ 書物は？
吾れは或る夏の夜にあの書物を書き終つた時、
全身の血が歌うたひつゝ脈打つを覺えた。
夜更けて、吾が總ての知識を暗くせんとする此の歌の幾節かを、
序曲として吾が書の中に印刷しやうと思つた。しかし、
思ふに、其の調は少し輕すぎた。あの歌を
今も尚ほ想ひ起すか？ エルザ！ あれは時を費すに好い。
あの歌を書いた夜は樂しかつた！』

こゝに、うづくまり居た影法師の一人が頭を擧げて、
恰も、母が兒に歌ひきかす如く、
昔し彼れが書いた歌の數語をさゝやいた。

遠い昔しのカタイの國に、
西の國々が開けた前、
恰も扇の影にてか
日の光り食するが見えたり。
人々は塀の上に登りて見る。
火は灰と消え、
世は深き眠り
寶石の大空や硬玉の塔に落ちぬ。

アラビヤでは、砂漠の上に。
人々は細き褐色の手をのべ
大空の「ひつじ」や「さそり」を眺めつゝ
天の意を知らんと勤めしが、効なかりき。
人々の足跡が消ゆるを待たで、
大砂風に其の印しは消え、
文字は皆洗ひ去られて
只、砂漠のみ月にさらさる。
紫紺の夜のバグダドでは
ハルン・アル・ラシド王が塔を建て
聖者たちは千夜の空を見はりつゝ
毎時間、譚を講ぜりき。

塔はくづれ、カリフは死し、
其の測天儀は錆び朽ちぬ。
オリオンは尚ほ頭上に輝やけど、
アラデンの燈火は砂中に埋れぬ。

バビロンよ、バビロンでは
人々は土の塊をやき
年々に、それに刻印して
暗き日の食を記しぬ。
日輪に「メネ」「メネ」と
指の動きを見しが
更に大なる影其の光を掩ひぬ、
バビロンの土は遂に土のみ。

一つの影法師が戸口から彼に近づき
コペルニクは、叫びつゝ、頭を舉げた。
『書物か！ 吾は見えないが、手にて
表紙の文字に觸れさせよ！ これだ！
燈火を消せ。カーテンを開けよ。
吾が顔に星の光を當てゝ、死を來らせよ。
天使の御手を吾が手に…………さうだ。吾は言ふ
今や吾が最後ぞ…………光りを、もつと光りを
天國の夜の平和へ。』

(終)